

パットナムの『孤独なボウリング』からの示唆

－高齢者の集う「場」としての老人クラブ連合会の可能性－

依田 夏喜

現在の日本は超高齢社会であり、高齢化率は30%になりつつある。そうした中、65歳以上の一人暮らし高齢者が増加傾向にあることから、社会的孤立が懸念される。社会的孤立は精神的な孤独感が募り、病気や怪我を負った際に周りに頼れる人がいないため、孤立死につながるケースがある。本論文の目的は、高齢者の社会的孤立を防ぐには「場」が必要であることを示し、高齢者の孤立の予防を考察する。

高齢者が孤立死に至らないために、人とのつながりを形成していくためには、アメリカ社会のコミュニティの崩壊について論じた、パットナムのソーシャル・キャピタルが不可欠である。ソーシャル・キャピタルとは、「ネットワーク」「規範」「信頼」の3つが成り立つことで形成される。

そこで、高齢者が集う場として、老人クラブ連合会を事例として取り上げた。実際にA会の老人クラブへ調査を行った。研究方法は、主にアンケート調査を用いて高齢者の参加者の生きがいや孤独感の有無などの実態を把握した。老人クラブに参加することで、生きがいが増え、孤独感が和らいだ高齢者が多いことが確認された。

結果として、老人クラブ連合会は参加する高齢者に対して認知症予防やフレイル予防、孤立死の予防に寄与している。しかし、本調査では老人クラブ連合会が、パットナムが示唆するソーシャル・キャピタルを形成した「場」であることは顕著に確認することができなかった。ソーシャル・キャピタルの「規範」「信頼」の2つが限定的であるため、ソーシャル・キャピタルの形成にはならない。

以上のことから、パットナムが示唆するソーシャル・キャピタルを形成し、それが結果として高齢者の社会的孤立を軽減し、孤立死のリスクを低下させると仮説を立てたが、調査を行った結果、仮説どおりではなく老人クラブはソーシャル・キャピタルを形成しにくく、孤立死のリスクを低下させる場として困難な状況にある場だと明らかになった。